

第 2 部

図書館に想う

関西大学図書館創設 100 周年に寄せて



市川 訓敏

関西大学図書館が創設 100 周年を迎えたことを心からお喜び申し上げます。図書館の運営に携われてこられた先輩諸氏をはじめ、図書館の活動にかかわってこられた皆さまのご尽力に、あらためて敬意を表します。

記録によれば、当初の図書館は、大阪区裁判所（現在の簡易裁判所に相当する）の土蔵を買い受けて、大阪市北区上福島にあった当時の福島学舎の正面玄関手前に、図書館として改築したもので、わずか 20 坪の建物であったそうであるが、独立した図書館の建物を持てたことで、学生たちの勉学への意欲もさぞ高まったことと思われる。この大正 3（1914）年から 8 年後の大正 11（1922）年には、「大学令」にもとづき、名実ともに大学として昇格するとともに、服部嘉香作詞、山田耕筰作曲の現在の「学歌」も制定されるなど、発展のあゆみを着実に進めていた時期であったが、100 年の歳月を数えるまでには、それこそさまざまなことがあったにちがひなく、そのことを思うと、感慨も一入である。

筆者が、当時の河田悌一学長（現、日本私立学校振興・共済事業団理事長）の指名により、田中登館長の後任として、第 21 代図書館長に就任したのは、平成 18（2006）年 10 月のことであるが、その直後に、創立 120 周年の記念式典が挙行されたことで、強く印象に残っている。

また、この時期に前後して、法科大学院や会計専門職大学院、臨床心理専門職大学院が相次いで設置され、工学部を改組してシステム理工学部、環境都市工学部、化学生命工学部を開設、さらには政策創造学部や外国語学部の新設、北陽高校・中学校の開設、高槻ミューズキャンパス及び堺キャンパスの開設、人間健康学部や社会安全学部の新設、高等部、中等部、初等部の開

校などがつづき、それにともない、新校舎の建設やキャンパスの整備などで、地鎮祭や竣工式がたびたび実施されたことも記憶に新しい。

そうしたことから、図書館としても従来の運営のままというわけにもいかず、さまざまな対応を迫られることになったが、なかでも大変だったのは、増加した在学生数に座席数が追いつかず、既存のスペースのなかで、どれだけ座席数を確保するかということが大きな課題になったことである。そのため、関係者の間で知恵をしぼり、創意工夫を重ねて、事務室を移転するなど、図書館の配置を大きく変えることになった。現在の総合図書館は、大学創立100周年にあわせて、現在の場所に設立され、当時は相当大きな建物であると思ったものであるが、その後の大学の規模の拡大を考えると、決して大きいとは言えなくなってしまったようである。

また館長に就任して気がついたことだが、それまで一利用者として図書館を利用して、図書館の活動について、ある程度知っているつもりでいたが、実際には図書の閲覧や貸出しなど、ごく一部の業務しか知らなかったわけで、内側から見てみると、図書館では、いくらでも仕事があって、猫の手も借りたいというのが、実状だったと思う。

図書館の業務は、大きく分けて全体的な管理運営にかかわる部門、図書館資料の収集や整理、管理にかかわる部門、利用サービスに関する部門、システムの構築や運用にかかわる部門などがあるが、図書館の利用を促進するための業務だけをとっても、広報活動の充実やホームページの作成、図書館ガイダンス、春・秋の特別展示、学習や研究の支援、レファレンス・サービス、ILL業務など、さまざまな業務が行われているし、サービスについても、多文化サービスや、当時重視されるようになった生涯学習を支援して社会貢献に資するといった観点から、本学と協定を結んでいる吹田市、池田市、八尾市、高槻市、堺市に在住の方を対象に一般開放するなど、サービスのあり方も多様化するようになったし、放送局や出版社、美術館、博物館などからの特別閲覧や貸出しなどの照会も頻繁にあって、そういう図書資料を所蔵していることを、審査の段階ではじめて知ること多かった。特色あるコレクションとして、「大阪文芸資料」など、種々の図書資料を系統的に集めていた

ことによるものであった。

図書館の業務を行うなかで、高度に専門的な知識や判断を必要とすることも多く、簡単に決められない問題も数多くあった。河田学長や当時の安部誠治副学長から助言を受け、励まされることもしばしばであったことも忘れない思い出である。大阪市立大学、大阪府立大学との相互協力を実現できたことや、早稲田大学図書館やハーバード大学燕京図書館との間に相互協力関係を築けたことなど、サービスの拡大というだけでなく、関西大学図書館にとっても名誉あることであったと考えている。

図書館の日頃の業務にあっても、さまざまな創意工夫やアイデアが必要で、図書館員の高い見識と不断の研修に支えられていることを実感する場面もしばしばあった。多忙な中でも、勉強会を開くなどして、研鑽を積まれている姿を見かけることも多かった。日本図書館協会が定めた「図書館員の倫理綱領」においても、図書館員の利用者に対する責任、資料に関する責任、研修につとめる責任、組織体の一員としての責任、図書館間の協力、文化創造への寄与を明記しているが、長年にわたり活動してきたライブラリアンたちの叡智が「倫理綱領」に結実したものに違いなく、いずれの図書館でも、そうした努力なしには、図書館活動の充実は覚束ないといってよいだろう。

関西大学図書館は、平成 21（2009）年 4 月より、平成 23（2011）年 3 月までの期間、私立大学図書館協会会長校に就任することになり、図書館長が自動的に私立大学図書館協会の会長に就任した。そのため、図書館内に担当部局を設け、必要予算を確保するとともに、さまざまな準備をはじめ、あらためて協会の事業を正しく把握して、取り組んでいかなければならなくなった。

平成 21（2009）年当時の私立大学図書館協会の加盟校は、東地区、西地区合わせて 520 校であり（平成 25（2013）年現在では、加盟校総数は 533 校になっている）、同時期の私立大学 595 校のうち、9 割近くの私立大学図書館が加盟する組織率の高い団体である。もっとも、それぞれの加盟校は、大学としての規模も、経営理念や教学方針も多様であり、置かれている状況にしても千差万別であるが、共通する問題や連携して取り組むべき課題も多

くあることから、それらを調査研究し、その成果を共有するとともに、相互の交流や協力を強化することで、図書館活動の改善や発達に資するという目的のために、同協会は設立されている。したがって、加盟校、未加盟校ともに、協会に加盟することの意義やメリットを実感できるような活動を活発に展開することが、協会に課せられた大きな責務であった。

協会では、いくどかにわたって、『私立大学図書館協会史』を刊行しているが、それらによると、もともと、昭和5（1930）年に、東京の主だった私立大学が集まって「東京私立大学図書館協議会」を発足させ、昭和13（1938）年には関西地区においても、これに加盟しようとする運動が起き、そうしたことから、「東京私立大学図書館協議会」を発展的に解消して「全国私立大学図書館協議会」を成立させ、第1回の創立大会が開催されたのであった。協会史によれば、昭和初頭の私立大学は、全国で26校、東京に18校、関西に7校（同志社、龍谷、大谷、立命館、関西、高野山、関西学院の7校）、その他1校とあるから、数の上からも、まとまりやすくもあり、共通する問題も多くあることから、連携する機運が生まれたということであろう。

その後、昭和18（1943）年の第6回大会において、会員の増加などのため、規約を改正するとともに、現在の「私立大学図書館協会」に改称することになり、この中央大学で開催された第6回大会には、関西大学の初代図書館長に就任した岩崎卯一教授が参加して、「規約改正委員会」の座長として原案作成にあたったことが記録されている。戦時下の交通難、食糧難などのため、開催が危ぶまれた大会であったといわれているが、そうしたことを乗り越えて、志しを持った先輩諸氏たちが、戦前戦後を通じて、営々と築いてきた協会であったわけで、そういうことを知り、会長校としての責任の重さをあらためて感じた次第である。

もっとも、会長校に就任した前年の平成20（2008）年は、18歳人口の減少にともない、私立大学の入学定員割れの割合は、過去最悪の47.1%となり、平成21年（2009）度も46.5%であって、私立大学の半数近くの大学において定員割れが起きていた。最近になって、やや改善してきた印象はあるが、当時は、いずれの大学においても、相当な危機意識を持っていて、経営基盤

の見直しが迫られるなかで、時代に応じた図書館のあるべき姿を検討すること大きな課題になっていることが、関係者から指摘されていた。

また、最近になって改善されているといっても、深刻な状況に大きな変化はなく、とりわけ、比較的規模の小さな大学や、中国地方や四国地方など、大都市圏以外の地域では、慢性的に定員充足率が低い状態がつづいていることから、図書館活動の充実にまで、なかなか手が回らないということも言われていた。

公共図書館については、行政改革の一環として、PFI 法が平成 11（1999）年に制定されたことで、民間資金を活用して公共サービスを提供する道が開かれ、図書館運営についても、PFI 方式を採用するところが登場した。平成 15（2003）年には、地方自治法の一部改正により、「公の施設」の管理運営を包括的に特定の民間団体に委任できる「指定管理者制度」がスタートして、公共図書館に、それを適用するところが出てくるようになり、最近でも武雄市図書館のケースなどが注目されているが、その武雄市図書館では、「いつでも、どこでも」借りられる電子図書館サービスを提供する試みを行うなどして、経費削減という観点とともに、多様なサービスの提供をめざすユビキタス社会の要請に応えるという目的もあり、それらの取り組みの行く末については、これからも注視していく必要があるだろう。

大学図書館の運営にあっても、その運営の外部委託について、各図書館において、いろいろな模索がつづけられていて、ほとんどの図書館において、何らかの外部委託が行われているといつてよいようである。関西の大学図書館を見ても、とくに平成 20（2008）年前後から急速に増えていることを見ると、やはり、18 歳人口の減少による、「大学冬の時代」と言われた時期に重なっているように思われる。

大学図書館の場合でも、直接的には経費削減や費用対効果などを考えての業務委託ということがあるのだろうが、質の高い図書館サービスを安定的に供給しようとした場合に、一部の業務を専門的な知識やスキルを持った優秀な委託スタッフにゆだねることで、職員全体の配置計画など、その後の図書館運営の計画・立案が立てやすいという面もあるなど、メリットも大きいと

ということのようである。

本学図書館では、わりと早くに外部委託を導入していて、平成 12（2000）年には、閲覧サービスにおいて、夜間開館や祝日開館を実現するなど、開館時間数、開館日数とも大幅に向上させることが可能になった。利用者にとっては、使い勝手のよい図書館になり、とくに土日や祝日が使えることで、どれほど助けられたことか知れない。学生や他の利用者也、その恩恵を受けた人は多いのではなかろうか。

外部委託には、このようにメリットも大きいですが、さまざまな課題もあることから、利用者の声や、他大学での取り組みなど、今後も検討に検討を重ねることが必要になるだろう。

よく知られていることだが、「国立国会図書館法」の前文には、「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される。」とあり、国会図書館東京本館の目録ホールの壁に、初代館長であった、憲法学者にして日本国憲法制定当時の憲法担当国務大臣を勤めた金森徳次郎の筆跡で、「真理がわれらを自由にする」という文言が刻まれている。戦後すぐに作られたものであるが、その言葉は、時代を越えて、今なお、国会図書館に限らず、すべてのライブラリアンの精神ではないかと思う。

（いちかわ くにとし 法学部教授・元図書館長）

図書館の思い出、図書館への思い



北川 勝彦

人の時間感覚はそれぞれであるが、関西大学の図書館が設置されてから100年の時間を刻んできたことは実に感慨深いものがある。この短い文章では、私の研究生活に関西大学図書館がどのようにかかわってきたか、思い出すままに綴ってみることにする。

私が関西大学経済学部に入学したのは、昭和41（1966）年の春であった。学部の学生時代をふりかえって思い出すことといえば、二つある。ちょうど、2年次生のときに、教職課程科目を履修していた私は、文学部の専門科目で横田健一教授の「日本史概説」を受講したことがあった。当時の講義のテーマは確か「日本の近代化における革新と伝統」であったと思う。横田先生は、講義の中で、近代化ないし工業化の源流、すなわちイギリス産業革命について論じられ、経済学部の矢口孝次郎教授の業績を紹介しつつ、東京大学の大塚久雄教授との論争について説明してくださった。もともと歴史に関心の強かった私は、さっそく矢口先生の『資本主義成立期の研究』と大塚先生の『近代資本主義の系譜』の二冊を読んでみることにした。現在、ITセンターになっている円神館は、経・商・工専門図書館と呼ばれ、その二階に閲覧室があった。空調もない時代のことで、初夏から夏にかけて汗を拭きながらこの二冊の本をすべてノートに書き写したことをつい昨日のように思い出す。

その後、3年次生になって、私は、矢口孝次郎先生の演習に参加することを許された。矢口先生の演習では、ハートウエル（R. M. Hartwell）のイギリス産業革命の論文がテキストとして使用され、各演習生は、その内容から個別のテーマを選んで研究を進めた。私は、産業革命の本質論争に関心をもった。すなわち、産業革命は、それまでのイギリス経済史の展開との関係で

「断絶」とみるか「連続」とみるか、あるいは産業革命の結果、人々の生活水準は「改善」したのか「悪化」したのか、という論争である。いわゆる「生活水準論争」に関心を持った私は、4年次生の春に、矢口先生の研究室を訪問し、イギリス経済史学会の『経済史評論』(*Economic History Review*)をお借りして、ホブスボーム(E. J. Hobsbawm)とハートウエルの「生活水準論争」の論文を仔細に読み始めた。この論文の脚注には、夥しい文献が引用されており、その都度、専門図書館のカウンターにでかけて文献検索の指導を丁寧にしていただいた。当時、学部学生は入庫検索ができなかったので、法文の図書館(現在の博物館)や天六学舎の図書館の職員の皆さんのお手をずいぶん煩わせたと思う。この研究は、「産業革命期の生活水準問題——その最近の論争に関する一考察——」としてまとめることができ、経済学会の懸賞論文に応募したところ、幸いにして賞をいただくことができた。

4年次生の秋ごろ将来の進路に迷い込んでいた私は、矢口先生に懇切なご助言を賜ることができた。その折、矢口先生から精読を勧められた一冊がトーマス・カーライルの『衣服の哲学』であった。しばらくして、私が大学院への進学を決心したことを先生に申し上げると、先生から「5年間はしっかり修行するように」との返答であった。大学院修士課程での矢口先生の演習では、イギリス経済史の基本文献とならんで産業革命の指導的産業部門であった綿工業の歴史に関する基本文献を読むことになった。シドニー・チャップマンの『ランカシャー綿工業史』(Sydney J. Chapman, *The Lancashire Cotton Industry: A Study in Economic History*, Manchester, 1904.)を毎週、一字一句のがさず丁寧に読みすすめていったことは、後々までも私の読書に生かされていった。私を指導するために、この本の各ページの空欄に記された矢口先生の鉛筆書きのメモは、先生の周到な準備を如実に語っている。大学院の学生時代に演習で読んだ書物の多くは、矢口先生ご自身の蔵書からお借りしたものが多かった。先生の蔵書は、後に『矢口文庫』として総合図書館に収められることになった。現在でも、ときどき『矢口文庫』の蔵書を手にすることがあるが、先生の読書範囲の広さと深さをしみじみ感じる。

大学院修士課程での2年間の研究は、「イギリス産業革命期の綿工場にお

ける児童労働の実態」と題する修士論文にまとめられた。この修士論文に関する史料の調査、研究、および執筆の過程では、当時、少しずつ図書館に収められつつあったアイルランド大学出版のイギリス議会文書のシリーズを大いに参照したものである。関西大学の図書館には、イギリス史に関する研究を行う上で、上下両院の『ハンサード』をはじめ、『フェビアン・トラクト』にいたるまで充実した蔵書があり、私は、これらの史料の蓄積は、他に誇るべきものだとも思う。

大学院に在学中、私の研究にとって大きな転機が訪れた。当時、近々70歳の古希を迎えられる矢口先生をお祝いして古希記念論文集の出版が計画されていたようであるが、私のように博士課程の学生には知るよしもなかった。ところが、2年目のある日、矢口先生からお呼びがあり、ご自宅でお目にかかると、イギリス帝国経済史についての論文集の出版を計画しており、イギリス帝国の中で南アフリカの経済史について論文を書くようにとのご指導であった。私にとっては初めての研究領域なので、具体的にはハーバート・フランケルの『アフリカにおける資本投資——その過程と結果——』(H. Frankel, *Capital Investment in Africa: Its Course and Effects*, 1939) という書物を丁寧に読んで、「南アフリカにおけるイギリス投資」と題する紹介論文にまとめるようにとのご指導をいただいた。ただ、この書物は、関西大学には収蔵されていなかったもので、東京大学の蔵書を高橋幸八郎先生を介して和歌山大学の角山榮先生が借りて下さるので、角山先生のご自宅に出かけて受け取り、その際、いろいろご指導をうけるようにとのご指示であった。論文集にご執筆に当たられる先生方は、それまでお名前は存じ上げていても、はるか雲の上の先生ばかりで、私にとっては大変なプレッシャーであった。ご執筆にあられた先生方のご指導の下で書き上げた論文は、矢口孝次郎編著『イギリス帝国経済史の研究』(東洋経済新報社)に収められることになった。この過程で、出会った角山榮先生は、今日にいたるまでずっとご指導いただくことになろうとは、当時は、夢にも思わなかったことである。フランケルの書物は、後にリプリント版が出版され、現在も総合図書館に収められている。

大学院の博士課程を終えた私は、昭和 50（1975）年 4 月に通信課程の大阪府立桃谷高等学校（旧大阪府立大手前高等学校通信部）に奉職し、昭和 54（1979）年 4 月からは関西外国語短期大学の専任講師に着任して、大学教員の道を歩き始めた。その前年には、矢口先生は他界され、もはや直接にご指導を仰ぐこともできなくなった。今から思えば、この時の私は研究生活の大きな岐路に立っていた。当時、私は、平成 26（2014）年の 3 月になくなられた荒井政治先生からは『産業革命の展開』（有斐閣）に収める産業革命の論文の執筆、角山榮先生からは『講座西洋経済史』第 3 巻（同文館）に収める南アフリカ経済史の論文の執筆、という 2 つの仕事をお願いしていた。やがて両者がイギリス経済史を理解する上で不可欠な「産業革命論争」と「帝国主義論争」に関わっているという点ではつながっていると考えた私は、以後、イギリス帝国経済史、とくに南部アフリカ経済史の研究を展開していくことになった。この研究では、やはり関西大学図書館に収められている膨大なイギリス史関係の一次史料（とくにイギリス議会文書）は大きな支えとなった。この間研究をすすめるにあたって、日本アフリカ学会の南アフリカ研究にたずさわっておられた先生方、後に関わることになるイギリス帝国史研究会の創立にかかわった先生方の学恩を忘れることはできない。

この後、私は、再び、関西大学図書館のお世話になる。広くはアフリカ経済史、狭くは南アフリカ経済史の研究を進めていくうちに、同学の外国人研究者とも交流する機会が増え、日本人アフリカニスト経済史家として独自の研究の展開を求められるようになった。とくにグラスゴー大学のフォーブス・マンロー（Forbes Munro）先生、ダルエスサラーム大学のキマンボ（Kimambo）先生のご助言の存在は大きかった。矢口先生がなくなれた後、研究上のいろいろなお指導をいただいていた角山榮先生にある日相談したところ、先生から外国人研究者とは異なる視点と方法を得るために日本領事報告資料の研究と利用を強く勧められた。私は、自らの考えるべき問題の一つとして日本—アフリカ関係史の研究をテーマに設定し、この資料とその周辺資料を調査するために昭和 61（1986）年以降、大阪府立図書館をはじめ関西大学図書館を活用した。とくに戦前に外務省通商局から出版されていた『海

外経済事情』の研究と利用では関西大学図書館を訪れる機会が増えた。これは、関西大学図書館の役割の新たな発見であった。

平成3（1991）年4月から3年間は、香川県善通寺市の四国学院大学教養部に勤務した関係で、関西大学図書館からは遠ざかった。しかし、縁は異なるものと言おうか、阪神・淡路大震災の起こった平成7（1995）年4月以降関西大学経済学部で勤務することになった。それ以後、経年的にサハラ以南アフリカの英領植民地政府文書を基本図書として蔵書に加えていただいて現在に至る。イギリス議会文書とこの植民地政府文書の整備は、東京の慶應義塾大学図書館を除けば、近隣の他の大学図書館にはない誇るべきものであり、私自身も多いに活用した。万博公園にある国立民族学博物館に京セラ稲盛文庫としてイギリス議会文書が入ったときも、その整理にかかわった職員を含めて共同研究会を立ち上げ、連携研究を行った。その折、関西大学図書館の当該資料の整備状況について調査報告する機会があったが、これは、意外に知られていない関西大学図書館史である。この共同研究の成果は、『アフリカと帝国——コロニアリズムの新思考にむけて——』（晃洋書房）として出版された。

ところで、私は、平成21（2009）年10月から平成24（2012）年9月まではからずも関西大学図書館長となり、同時に私立大学図書館協会会長を拝命した。在任中は、各種の会合に出席し、国内外の大学図書館の現状と図書館行政について学ぶことができた。それこそ図書館行政の勉強の日々が続いた。大学において図書館の位置づけや役割が自明のことで、問うこと自体が疑問視される時代が終わり、今ほど「大学図書館とは何か」その存在意義を説明できる実践的で説得的な理念が必要とされている時代はないように思われた。大学図書館はまさに重大な歴史的転換期を迎えている。関西大学における総合図書館をはじめとする図書館群も決して例外ではない。

今日の大学が置かれている競争的な環境の中で、大学図書館は、一方で相互に連携しつつ他方では各大学の独自性と競争力を支える役割が期待されている。すなわち、図書館の提供できるサービスの質と量が今ほど問われている時代はない。その中でも教育研究環境を支える情報基盤をどのように構築

していくかは図書館運営の最重要課題である。現在では、学術情報がデジタル情報として生産され、流通し、消費される事態が一般的となっており、自宅でも研究室でも、時には移動中であってもネットワークを介して情報資源にアクセスが可能になっている。大学図書館に求められているのは、教員の教育研究はもとより、学部学生の生活動線の中で図書館サービスのプレゼンスを高める運営、大学院教育と一体となった研究ファクトリーとしての機能、大学独自の学術情報やデータベースの開発・構築・発信において主要な役割を演じることである。

このような状況の中で、近年、大学図書館の存在証明の一つとして取り組まれるようになったのは、リテラシー教育である。今や大学図書館の教育的機能は大きな転換期にある。学生にとって必要なリテラシーの習得と向上の機会が授業だけではなく図書館も含めて計画的で体系的に用意されねばならない時代を迎えたからである。大学図書館には、大学での教育改革における自らの位置づけと役割を認識しつつ、学生の主体的な学びとの連携に重要な役割を演じることが求められている。

(きたがわ かつひこ 経済学部教授・前図書館長)

図書館在職時の思い出



柴田 真一

昭和 52（1977）年 4 月関西大学職員として採用され、最初に配属されたのは図書課で、担当は和文雑誌の受入であった。その後、平成 12（2000）年 4 月に教務関係の部署に異動するまで 23 年間、図書館内のいくつかの部署で勤務した。平成 24（2012）年 4 月から退職までの 1 年間、再び図書館に配属された。この間、様々な仕事を担当し、多くのことを学ぶことができた。思い出深いことも多く、とても書ききれないが、その中でも特に印象深く残っていることを思い出すままに述べてみたい。記憶違いにより、時期が前後するなど、必ずしも正確でないことがあるかもしれないが、ご海容願いたい。

昭和 52（1977）年の夏、貸切バスによる図書館職員全体の研修旅行に出かけた。その往復の間、バスの最後部の席に、当時の館長と図書館各課の課長など幹部が集まり、ずっと話をされていた。何か問題でも起こったのだろうかと思っていたのだが、夏休み明け、当時の言い方で図書館業務機械化を行うことを知った。まず対象とするのが、雑誌関連業務であったため、担当者の一人として関わることになった。完全文系で、そういったことには全く興味も知識も無かったのだが、少しでもコンピュータのことを理解しようと、当時出回り始めていたパソコンを個人的に購入し、電算機に慣れようとした。やっと漢字が扱えるようになったばかりのパソコンと、図書館機械化に使われる大型コンピュータが全く異なるものだという事も理解できていなかったのである。しかし、そのおかげで、早くからパソコンに親しむことができ、その後の、事務業務の IT 化についていくことができたとも言える。英文タイプライターを業務に使っていたので、タッチタイピングで使えるように、

キーボードの練習をしていたことも、パソコンに慣れやすかった一因かもしれない。

昭和 60（1985）年 4 月、新年度の授業開始にあわせて総合図書館が開館する。このとき、利用者サービスを担う閲覧参考課に異動した。総合図書館への移転では、2 月に期末試験が終了してから、1 ヶ月足らずで、旧千里山本館と専門図書館の蔵書併せて約 100 万冊を移転させ、残りの 1 ヶ月足らずで、閲覧貸出システム用の装備などを完了した。もちろん、それ以前から移転の準備作業は進められていたのだが、2 図書館の蔵書全体を分類順に並べ替えなければならないなど、相当な作業量になると思えるものを、概ね順調に移転させ整備した計画は、見事なものだったと思う。移転作業の概略を記しておく、事前準備として、① 2 図書館の配架資料の一定レベルでの分類別の実測調査を行い、② 計測した配架長から、総合図書館の棚への割り付けを行い、2 月の休館後に③ 一定の長さ毎に、配架場所の記号を記した紙とともに資料を結束バンドでまとめ、④ 総合図書館の指定の場所に配架し、結束バンドを切った後、微調整を行うというものであった。

総合図書館移転後は、主にレファレンスカウンター（現在はメインカウンターの横に設置されているが当時はレファレンスコーナーに専門のカウンターが設置されていた）やメインカウンターに勤務し、レファレンス業務、書庫図書の出納、貸出等を担当した。この時期は、図書館業務に関して、最も勉強になった時期であったように思う。空いた時間や勤務後の時間を利用して、1 階レファレンスコーナーや書庫内のレファレンス資料を実際に見て回り、どのようなことを調べられる資料があるのかを把握したり、相談を受けたことを調べるためには、もっといい方法があったのではないかと考えたり、請求された書庫図書が貸出中だったり、不明だったりしたときに、対処方法を請求者にアドバイスするために、書庫内の資料全般について調べてまわったりしたことで、様々な分野の資料に詳しくなれたと思う。また、実際に、利用者と接し、相談を受けたり、トラブルに対処したりすることで、人との対応についても多くを学ぶことができた。書庫図書が出てきたとき、請求者の名前を呼び間違えないように、「閲覧・貸出申込票」に氏名のフリガナ欄を

付けることを提案して、採用されたことも懐かしい。

7年後、収集整理課に異動し、和書の収集を担当する。大阪文藝、大坂画壇資料や、江戸時代以前の和古書の収集などを担当した。図書館の方針に従って、様々な古典籍の収集にあたっただが、購入対象でないものも含めて、多くの貴重な古典籍に接することができ、適切な収集資料を選ぶために、江戸時代の出版物のことなど、いろいろなことについて改めて学ぶことができたのも、大変貴重な経験であった。また、研究者の協力の下で、芝居番付、大坂画壇資料の冊子目録作成に関わることができたのも、それまで接する機会が少なかった多くの資料に接し、専門の研究者から直接解説をうかがうことになり、視野を広げることができた。

その後、天六キャンパスにあった第2部の移転に伴う開館時間、貸出可能時間の延長要望、開架閲覧室の利用に限られていた日曜開館を書庫図書等に拡張することなどに対応するために、閲覧サービス業務のアウトソーシングを導入することに関わった。図書館職員が利用者との接点を失わないように、レファレンス業務は職員によって行うことにするなどの対策を取り、修正を加えながら円滑に運用できるように関わっていきたいと思っていたのだが、運用開始を前にして異動することになった。また、次の目標として、貴重書の情報発信を充実させようと準備を始めていたが、関わることができなくなったことも残念であった。

久しぶりに図書館に異動してきたときには、閲覧サービスは全て委託する体制となっていた。よりよい図書館サービスを提供するためには、管理、収集を担当する図書館職員が、利用者サービスの実態を把握する努力が欠かせないというのが、両方の部署を担当した実感である。利用者サービスを委託しているのであれば、なおさら利用者の声をしっかりと汲み上げていくための体制の整備が必要ではないかと思う。最初の23年間の業務の中では、研究者、学生等の利用者との距離が近く、特に研究者との接触がもっと濃厚であり、その意見を受け止めることで、研究、教育の動向を把握して、資料収集や図書館運営に役立てるということをやっていたように思う。久しぶりに図書館に戻ってきて見ると、この点がかなり弱くなっているように感じた。

現在では、検索システムが格段に充実しているが、古典籍資料は、出版されている現代の図書資料などとは性質が異なる。開館以来 100 年間にわたって蓄積してきた貴重な資料の活用のためにも、個別の資料をわかりやすく紹介し、所蔵の事実を広く知らせることが欠かせない。また、使いやすい環境の整備にさらに取り組むことも必要であろう。

長い時間を費やして収集されてきた膨大な蔵書が、活き活きと利用されるように、さらなる努力が継続されることを期待したい。

(しばた しんいち 元図書館次長)

数々の貴重書



田中 登

今般、図書館が開設して100周年を迎えるという。まことにめでたいかぎりである。思えば、私がこの図書館長に就任したのは、平成15（2003）年10月のこと。図書館運営などには何の知見もない私であったが、翌年「関西大学図書館フォーラム」第9号の巻頭感に「大学図書館の使命」と題して、次のようなことを記させていただいた。

「情報システムの急激な変化は、大学図書館のあり様にもさまざまな形で影響を与えている」「今や、大学図書館は、（中略）大学全体の情報交換さらには、他大学や他の諸機関との情報交換の中心的役割を果たすようになってきている」「こうした情勢はおそらく今後もこれまで以上に加速度的に進むにちがいない。その結果、必然的に図書館という機関が果たす役割も、従来のものとは、いささか異なってくることになろう」「だが、（中略）大学が大学という看板を掲げる以上、市町村の図書館とはまた自ずと異なった役割が、そこにはあるはずである。（中略）高度な学術機関としての大学にふさわしい、貴重な書物の所蔵なども、そのひとつといえよう」「わが関西大学図書館は、これまでも、そうした学術上きわめて意義深い貴重な文献類の収集に力をそそいできた。その結果、（中略）名実ともに世間から高い評価を得ているのは、これすべて先人たちの高い見識と努力の賜物である」「大学冬の時代といわれて久しく、図書館の予算など、（中略）年々歳々厳しくなることが予想されるが、（中略）泣き言ばかりいってもいられない。そこは、なんとかわれわれの創意と工夫によって、限られた予算の範囲の中でも、学術的に価値の高い書物の収蔵に、よりいっそう努めていく必要がある」。

以上は、今からおよそ10年程前の文章であるが、現在も、その気持ちに

変わりはない。関西大学に勤務して今年で19年。この間、私が関係している諸学会の開催などの度に、小なりといえども、図書館の所蔵品などを利用して資料展を開かせていただいていた。以下、そうした展示品などの中から、想い出深い典籍について、ここに記しておこう。

まずは、天下に名だたる廣瀬本万葉集について（口絵写真参照）。この本は、関西大学第26代学長の廣瀬捨三先生の旧蔵品。先生の御専門は英文学であったが、また無類の本好きでもあって、洋書のみならず、数々の和書をも集めておられた。先生は、この喩えようもなく貴重な本を、大阪のさるデパートの即売会で買い求めたという。そして、この本の学術的性格に照明を当てたのは、当時、文学部国語国文学科の専任であった木下正俊・神堀忍両教授。このお二人の先生方のご尽力によって、廣瀬本万葉集は、一躍学界の注目するところとなったのである。

この廣瀬本自体の書写年次は、江戸も中期の天明元（1781）年のことというから、万葉の写本としては、それほどびっくりするような古さではないが、何といっても、見過ごすことができないのは、この写本の元となった本の奥書に、次のような文言が見えていることである（原文は漢文）。

秘本を校合して、直に和字を付けおわんぬ。不和の長歌に至るか。老眼疲るによりて、委しくは見えず。重ね重ね見合すべし。

参議侍従兼伊予権守藤（花押）

詳しい考証はここでは省略するが、問題は最後の「参議」「侍従」にして、しかも「伊予守」を兼ねていた人物、すなわち、この花押の主こそが、かつて廣瀬本万葉集を書写した人ということになるわけだが、これが誰だろう、数々の古典作品の書写作業に功のあった藤原定家その人のことなのである。この奥書の解説に至るエピソードについては、これまた当時国文の専任であった片桐洋一教授の回想録『平安文学五十年』（和泉書院）という本に詳述されているので、是非とも参照されたい。

さて、この廣瀬本万葉集が、藤原定家の手を経たものであることが分かってみると、さあ、大変。その本文内容と併せ鑑み、同本はたちまち学界有数の貴重な伝本ということになってきたのである。それがいかに学術的価値が

高いかは、『校本万葉集』新增補版（岩波書店）の解説に寄られたいが、ごく最近のものでは、昨秋、関西大学で開催された和歌文学会で廣瀬本万葉集について講演をされた、国文学研究資料館の田中大士氏の懇切丁寧なる論文「廣瀬本万葉集とはいかなる本か」（関西大学アジア文化研究センター発行「ディスカッションペーパー」第8号）が委曲を尽くしているので、興味のある方は、是非ともそれに寄られたい。

次に、同じく万葉集関係者の間ではよく知られた春日本と呼ばれる古写本の断簡。これはもと南都の神官・僧侶らによって書かれた和歌懐紙の紙背に、中臣祐定が万葉集を書写したもので、その奥書から寛元2（1244）年のことであったと知られる。ところが、江戸時代に入ると、表の万葉集よりも、裏の和歌懐紙の方が尊重されるようになり、それがために本は解体され、和歌懐紙を表として掛軸などに仕立てられたりする始末。だが、近代に入って、万葉学者の佐佐木信綱が裏面の万葉集に注目するようになると、再び万葉集に光が当たるようになったのである。かように、書物として、数奇な運命をたどった春日本であるが、現在では、万葉集・懐紙ともに国文学上・書道史上の貴重な資料として、大事に扱われている。

さて、関西大学図書館蔵の春日本は、わずかに巻19の歌4首を伝える古筆切1枚にすぎないが、後世、万葉集の流布本の礎となった仙覚の書写校訂した本より以前に書写した本として、学界でもことのほか珍重されている。この切は、私の図書館長時代に、京都のさる古書店に出て、大学に購入してもらったもので、私にとっても、愛着措くあたわざる品となっている。

万葉集の次は、古今集。古今集は、わが国初の勅撰和歌集だけあって、平安から中世にかけて、数かぎりないほどの写本作りがなされてきた。とりわけ歌人として知られる藤原定家は古今集の本文研究に熱心で、その生涯に実に17度も古今集を書写したという。その内、後世に流布したのは、定家の晩年、貞応2（1223）年7月に書写校訂したもので、今日世に伝わる9割以上の写本が、この貞応2年本に属するといわれている。

さて、関西大学図書館の本とはいえば、定家本としては珍しい、建保5（1217）年2月に書写された本の流れを汲むもの。この建保5年本は、従来、

定家の明月記に古今集を書写した旨の記事が見出されはするものの、本文そのものは、その存在が知られていなかった。関大本は、この建保5年本を、天文5（1536）年に三井寺の持教というお坊さんが写したものだが、この系統唯一の伝本として注目される。この本は、京都の古書店の目録に乗ったものが、当時関大の専任教授であった、古今集研究の第一人者片桐洋一先生の眼に止まり、関大図書館に入ったもの。この本の詳細については、片桐先生の大著『古今和歌集以後』（笠間書院）を参照されたい。

後撰集も古今集同様に後世流布したのは、藤原定家の手になる校訂本。従って、厳密にいうならば、平安時代の人々が読んでいた後撰集の形はこれでは分からないことになろう。関西大学図書館本は、江戸期の書写ながら、承保3（1076）年4月に写した旨の元奥書を持つ貴重な本。もと公卿の日野家に伝来したことから日野本八代集と称される写本の内の一。定家本とは、歌の出入りはもちろんのこと、歌序の相違や本文の異同等が少なからず認められ、注意される。この本は、先年103歳の高齢で亡くなった、文献学の泰斗久曾神昇博士の旧蔵本で、早く小松茂美氏の大著『後撰和歌集 校本と研究』（誠信書房）に全文翻刻されたが、その後、京都の古書店を経て、私の館長時代に、めでたく関西大学の所蔵に帰した。

拾遺集も伝本流布状況は、古今・後撰に同じ。従って、定家本以外の異本系統の伝本の出現が切望される分野である。もと平安後期物語研究に功のあった相愛大学の鈴木弘道教授の所蔵であった異本拾遺集は、これ自体は、江戸期の書写本だが、上下2冊本の内、上冊の方が伝本きわめて稀な異本系統のもの。なお、巻末には、文政10（1827）年林鮎主が、飛鳥井雅有筆の定家天福本で全巻を校合した旨の奥書があり、これはこれで貴重な存在となっている。

和漢朗詠集は、紀元1000年を少し過ぎた頃に、歌界の大御所藤原公任が編んだものだが、ひと度それが世に出るや、王朝貴族の大いにもてはやところとなり、平安・鎌倉期の写本・古筆切も汗牛充棟、実に数多くのものが伝わっている。ここでは、古筆切と古写本とを各1点ずつ紹介しておこう。

まずは、雲紙本朗詠集切。もと卷子本で、料紙には鮮やかな藍色の雲紙を使用。天地に各1条の墨界を施す。筆者を藤原公任と伝えるが、何ら確証は

なく、およそ12世紀のはじめ頃の書写になるもの。ツレ（もと同じ本から切られた断簡同士をかくいう）はいたって少なく、今のところ、拙著『平成新修古筆資料集』第3集（思文閣出版）に1葉見えるだけ。平安時代書写の朗詠集の古筆切として、珍重すべきものであろう。

ついで、生田本和漢朗詠集。大阪生田家の旧蔵品で、私の館長時代に、国文の関屋俊彦教授のご尽力によって、関西大学図書館に入ったもの。卷子本の上巻と下巻とでは、筆者を異にするようだが、紛れもなく鎌倉期の書写本で、古写の風格を備えた愛すべきもの。ただし、江戸期の補写部分が少なからずあり、その点が惜しまれはするが、紙背には、今は失われた朗詠江注（平安時代の碩学大江匡房の付けた朗詠集の注釈書）がたくさん書き込まれていて注意される。おそらく本文そのものよりも、この注釈の方が学問的には価値が大きかろう。

次に、北山切新古今集。古筆の世界では、昔から名の聞こえたこの北山切の筆者は、足利尊氏ということになっているが、これはどうせ愛好家を喜ばすために、江戸時代の古筆見が、歴史上有名な人物を引っ張り出してきただけのことだろう、というぐらいにしか従来は考えられていなかった。ところが、この本が出現してみると、何とそこには貞和6（1350）年2月に書写した旨の奥書があるではないか。これは完全に尊氏の生存年代とも矛盾しない。これで、北山切は尊氏真筆の可能性も出てきたわけである。これまた久曾神博士の旧蔵品。

最後に、藤原定家の明月記の断簡を（口絵写真参照）。大阪田尾家の旧蔵品で、もと関大職員のご遺族の方から図書館に寄贈されたもの。わずかに3行の切にすぎないが、後に千五百番歌合へと発展していった惟明親王の百首歌に関する記述が見られ、定家の自筆原本として、きわめて貴重な資料となっている。

まだ、この他にも、紹介したいものはたくさんあるが、紙数も尽きようとしているので、ここらあたりで終りにしたい。筆者の専門領域の関係から、内容が古典和歌に関するものばかりになってしまったことを、深くお詫び申し上げます。次第である。

関西大学図書館 100 周年にあたって

—— 私の夢想する図書館 ——

内田 慶市



関西大学図書館は、大正 3（1914）年に当時の福島学舎に初めて独立した図書館が創設されてから今年で 100 年を迎えることになるが、その長き歴史および規模から、大学図書館としてまさに日本有数の図書館である。

蔵書数に関して言えば、総合図書館、高槻キャンパス図書館、ミューズ大学図書館、堺キャンパス図書館を含めて約 220 万冊であるが、たとえば世界最大の大学図書館であるハーバード大学の 1530 万冊に比べたら、その数字が多いか少ないかは一概には言えないところではある。しかしながら、その蔵書数はともかくとして、本学図書館が世界に誇るべきものの一つに、東アジア関係の個人文庫がある。総合図書館に収められている個人文庫としては、増田文庫、泊園文庫、内藤文庫、長澤文庫、中村文庫、吉田文庫等があるが、これらの文庫は、まさに「知る人ぞ知る」コレクションであり、この分野の研究者の垂涎の的となっている。それはオックスフォード大学ボードリアン図書館のワイリー（Alexander Wylie）コレクション、ケンブリッジ大学図書館のウェード（Thomas Francis Wade）コレクションやバックハウス（Edmund Backhouse）コレクション、ロンドン大学 SOAS のモリソン（Robert Morrison）コレクション等にも匹敵するものである。

ただ、こうした日本でも希有の素晴らしい大学図書館ではあるが、一方でまた多くの課題も山積している。その幾つかを示せば、以下のようなものが挙げられるだろう。

1. 「ラーニング・コモンズ」に代表される図書館の新しい機能の付加
2. 紙媒体からデジタル化・アーカイブス化へ
3. 書庫の狭隘化への対応

4. 電子ジャーナル・データベース経費の肥大化への対策
5. 貴重書、コレクション等の取り扱い方＝「秘蔵は死蔵なり」

1については、文科省も施策として強く推し進めているものであるが、もちろん「コモンズ」が必ずしも図書館になければならないというものではない。しかしながら、図書館が本来「知の保管場所」という性格を有している以上、これを利用した学生の主体的学びの場の確保、あるいは学習支援という観点から本学においても積極的に推進すべきものだと考えている。

私は研究の関係からこの20年ほど毎年夏休みを利用して欧米の図書館での資料調査を行ってきている。そこでいつも感じるのは、歴史と伝統を背景にした図書館の「荘厳さ」と一方ではその「利便性」である。毎年訪れるローマのカサナテンセ図書館（図1）やイエズス会資料館、フランス国立図書館、ドイツのヴォルフエンビュッテルにあるヘルツォーク・アウグスト図書館やハイデルベルク大学図書館（図2）などはその建物からして重厚そのものである。いくら日本の大学図書館の歴史が長いと言ったところでこれらには到底敵わないのだ。しかし他方、欧米の多くの大学図書館ではコモンズやカフェが当たり前のように設置されていて多くの学生達がそこで24時間集い、



図 1



図 2

熱心に議論したり研究をしたりしているのだ。この状況は実は最近のアジア諸国においても同様であり、香港（図 3-5）や中国の大学でもコモンズは極めて充実しており、そこから世界大学ランキングトップ100に入るような「知」が形成されているのである。ところが、この国ではともすれば「コモンズなど作ったら図書館本来の静粛さが失われる」などといった意見が真顔で述べられたりする（一度でも実際にコモンズを見ればそういった不安は払拭されるはずなのだが）。もちろん、古典的図書館の「不易」の部分は当然維持されなければならないのだが、一方で「流行」＝「変革」も必要なのである。

2のデジタル化、アーカイブス化については、これまで本学図書館ではほとんど行われてこなかったものである。しかしながら、紙媒体からデジタル化は世界の流れである。Google や Hathi Trust Digital Library、Internet Archives、Open Library などの試みは言うに及ばず、世界の多くの大学、研究機関では大規模なデジタル化、アーカイブス化が急速に進んできている。アジア諸国でも中国の CADAL の 300 万冊デジタル化や台湾中央研究院の漢籍データベースなど大規模なプロジェクトが進行しているが、日本では、早稲田大学、国会図書館など一部で行われているに過ぎない。実は、環太平洋デジタル図書館連合（PADLA = Pacific Rim Digital Library Alliance）というのもカナダ、中国、韓国、台湾、香港、シンガポール、オーストラリアで組織されているのだが、日本では一つの大学も参加していない現状である。本学では、CSAC（アジア文化研究センター）が研究プロジェクトとしてこの数年来、個人文庫を中心に順次デジタル化とその公開を行ってきたが、まだ4,000冊足らずであり、今後、図書館としての取り組みが求められるところである。

3と4は、恐らくは他の大学図書館でも同じ状況であり、一つの大学だけで解決できる問題ではなくなってきた。

3の書庫の狭隘化に対しては、たとえば、香港の8大学で計画されているような「大学間共同書庫」「共同利用」を考える時期に来ていると考えている。せめて、関関同立の間からでもこれは試みられてもいいだろう。

4に関しては、ドイツでは「Cross Asia」と呼ばれる、ドイツ国家図書館

が主導して、国内の研究機関が一定の金額を国家図書館に支払うことによって機関所属の登録ユーザは制限無しにデータベースを利用できる仕組みが出来ている。120 種類ものデータベースを国家図書館が契約して、それをドイツ国内の大学、研究機関に利用させているわけで、この方式などは日本も学ぶべきものであると思われる。各大学がそれぞれジャーナルやデータベース契約を結んではコストも高くなる。近隣の大学で共同契約、共同利用を考えるべきなのだ。

5 は実はこれまで機会がある毎に触れてきたことであるが、東アジアの図書館に共通する「秘蔵」の発想を転換すべきだという基本的な考え方によるもので、結論から言えば欧米の図書館での Rarebook の扱いを見習うべきである。

筆者はかつて「秘蔵は死蔵なり」と題して日本の図書館における特に貴重書の公開のあり方に疑問を呈したことがある。（「秘蔵は死蔵なり——図書館と文献公開のあり方」『東方』360 号、2011.2）

それは前政権時代に「2 位では駄目なんですか」という一時期よく取り上げられた発言に絡んで毎日新聞（2010.1.12）の「憂楽帳」氏がハーバード



図 3



図 4



図 5

の図書館について述べたことに対しての私見であった。

ハーバード大学の顔、ワイドナー記念図書館は、ギリシャの神殿を思わせる重厚な建物である。(中略) 大学にはほかに 70 もの図書館があり、計 1620 万冊の蔵書数は学術機関として世界一。コレクションは毎年 30 万冊ずつ増えている。(中略)

しかし、驚くべきはその点ではない。世界中に張り巡らされたネットワークである。留学中、日本の図書館しか所蔵していない資料が必要になった。インターネットで必要事項を入力すると、3 週間後には海を渡って手元に届いた。

行政刷新会議の仕分け作業で、次世代スーパーコンピューター事業に対して「2 位ではだめなんですか」という議論があったが、その発想はあまりに貧しい。基礎研究と同じで、図書館の整備は直接、利潤を生まない。だからといってハーバード大が蔵書の充実に急ブレーキをかけるだろうか。志を下げた途端、「知の磁力」は失われるのだ。

この文章を読んで、私は、この御仁はおそらく図書館をまともに利用したことなどないのだろうと思った。ハーバード大学図書館の優れたサービスを取り上げるのはよい。しかしながら、そのことと事業仕分けあるいは「2 位ではダメなんですか」という発言とは全く無関係である。日本の図書館にハーバードの何十倍、何百倍の予算を付けたとしても今の日本の図書館の状況は全く変わらないと断言できる。つまりは、それは予算とか設備投資とかとは無縁のものであることをこの御仁は分かってはおられないのだ。氏は「2 位ではだめなんですか」ということに関して「その発想はあまりに貧しい」と述べているが、その言葉はそのままそっくり憂楽帳氏に帰すべきものののだ。その発想こそ余りに貧弱なのだ。

私は毎年欧米の図書館を何度も利用しているが、そこでいつも感じるのが日本や中国の図書館の「秘蔵主義」である。東アジアの図書館は総じて利用者の便宜に全く供していないのだ。憂楽帳氏が述べているのはインターライ

ブラリーローンというもののだが、そんなサービスは今や日本でもやられていることで、決して珍しいことではない。そんなことより問題なのは、たとえば、いわゆる「貴重書」「レアブック」の閲覧や複写サービスである。自分の大学を例にしても、貴重書は数日前にあらかじめ申請をしてその許可を得なければいけないし、また複写に関しても上で述べた通りである。

これに対して欧米の図書館では、紹介状もなしに飛び入りで行っても、基本的には即現物を閲覧させてくれるし、複写もほとんど全ページが可能である。

筆者の体験を少し記せば、数年前に、オックスフォードのボドリアン図書館に行った時である。日本から4人で訪れたのだが、紹介状も持たずにいきなり「ワイリーのコレクションを見せてもらえないか」と切り出すと、最初は戸惑った様子だったが、そのうちアジア関係の責任者が出てきて「どうぞ」と書庫まで入れてくれたのだ。その上、ワイリーだけでなくバックハウスのコレクションまで見せてくれた。マドリッド国立図書館でもバルセロナ大学の図書館でも同様であるし、一昨年のローマのカサネテンセ図書館でもそうだった。そうしたことは欧米ではしょっちゅう経験済みである。もちろん、礼儀として、紹介状と現住所確認のできる書類、それにパスポートを携帯することは必要であるが、仮にそれがなくても、研究者には随分と便宜を図ってくれることが多いのである。つまりは、「本は使われるためにある」という思想が徹底しているのだ。

書籍や図書館に対する基本的な考え方の違いが欧米と東アジアには存在するのである。このことを問題にしない限り、いくら予算を増やしたところで、真に利用者のための図書館にはならないのだ。貴重書はもちろんその保存に努めなければならないし、著作権は守られねばならない。が、それが決して「秘蔵」であってはならないのだ。「秘蔵」は「死蔵」であり、それは書籍の本来の使命ではないはずだ。むしろ積極的にデジタル化していくことの方が将来にわたっての保存にもつながるのだと私は考えている。こうした根本的な議論を抜きにして、ただただ「2位ではだめなんですか」ばかりを取り上げて鬼の首でも取ったかのように考えている憂楽帳氏は、ことの本質を全く

分かってはいないのだ。こうした日本や東アジアの図書館では氏の言われる「知の磁力」なんぞ、とっくに失われているのである。

この考えは何の因果か関西大学図書館長に命じられた今も変わることはない。欧米の図書館に比べて、貴重書の扱いは日本をはじめ東アジアの図書館は極めて「保守的」である。もちろん、最近はやや多くの図書館がその門戸を開放し始めてはいるが、それでもまだまだの感は否めない。そして、奇妙なことに、こうした「公開の度合い」は、知的所有権に対する意識の高低と反比例しているということである。欧米は知的所有権に対しての意識は非常に高いものがあり、著作権や所蔵権は厚く守られている。しかし、一方で徹底した情報公開、開示が行われているのだ。日本では逆に違法コピーがまかり通り、貴重書はごく限られた者にしか見せられないのだ。しかしながら、書物の使命は「読まれる」ことにあるはずだ。その使命を全うすることなく秘蔵されては、それはまさに「書物の死」なのだ。

以上の問題以外にも、たとえば、「書庫」という伝統的な考え方についても見直す時期に来ているように思われる。最近の大学図書館では「オール開架」という形も登場してきている。書物はKOALAなどの「検索」で見つけることも当然必要なのだが、それ以上に、実際に書架を一つ一つ見ていくことがより重要なのだと私は体験から思っている。検索はあくまでも「目指すもの」がある場合であって、書架を順に見ていくことで新しい発見が往々にしてあるのである。それは、電子辞書と紙の辞書との違いとよく似たものである。電子辞書はあくまでも引くべき単語が決まっているものである。一方、紙の辞書の場合には、引きたい単語の周りまで一緒に見ることが可能なのである。

また、欧米の図書館では当たり前の「ライブラリアン」の導入も日本でも考えられてよい。

日本では他の事務部署と同じように扱われており、採用も同じだし、当然、異動もある。しかし、図書館業務は一種の「専門職」である。せっかく図書

館業務を身につけたと思ったら、別の部署への異動である。これは実に非経済的ではないか。せめて図書館正規職員の半数は専門職として扱うべきであると思っている。

ところで、最後に、デジタル化時代において、紙媒体はどうなっていくのかである。

教室から紙の辞書が消えて久しく、語学の授業など、ある単語を調べさせると、一斉に同じような電子辞書が開かれる。確かに、紙の辞書よりも軽し携帯には便利である。近頃は、スマートフォンでも辞書アプリが入っている。iBooks等の電子図書も普及しており、最近ではページめくりが紙と同じイメージで実現されてはいる。しかしながら、こうしたものには、根本的に欠けているものがあると私は思っている。それは、紙の質感とか紙の匂いである。たとえば、あの古書独特の匂いは決してデジタルでは再現されないものである。紙の暖かみ、手触り、そんな中から知的興味が沸き立ち、書き込みや赤線を引くことで思索が深まっていくのである。デジタルとアナログは、決して相対立し、排除し合うものではない。「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」であるべきで、まさに人と人との関係における「みんなちがって、みんないい」と同じであると私は考えている。

(うちだ けいいち 外国語学部教授・現図書館長)

